

別添資料 1

内容

甲を着た古墳人が見つかった金井東裏遺跡の南に隣接する金井下新田遺跡で、6世紀初頭の勾玉を含む首飾りをした古墳人と建物構造が判明する平地式建物、さらに鍛冶遺構が発見されました。

(1) 首飾りをした古墳人 (写真2～4)

首飾りをした古墳人(人骨)は、昨年度馬骨が出土した竪穴建物で発見されました。古墳人は6世紀初頭に発生した榛名山の噴火に伴う火砕流によって吹き飛ばされ、竪穴建物が廃絶した後のくぼみに落ちたものと推定されます。人骨の状態は良好とはいえませんが、歯と上腕や大腿部と推定される骨が残っていました。頭骨は確認できませんが、頭部の位置や形は土の色が異なった範囲から推定できる状態で、この人骨の首付近から勾玉を含む首飾りが見つかりました。

勾玉や管玉から構成される首飾りは、カーブを描き土中に続いています。出土位置と首飾りの状態から、首にかけた状態と考えられます。金井東裏遺跡3号人骨も首飾りをした状態で発見されましたが、3号人骨の首飾りに勾玉は含まれていませんでした。

首飾りをした古墳人の性別や身長は不明、年齢は若年(10代)と推定されます。古墳などの墓以外から首飾りをした状態で人骨が発掘されるのは希有な例で、金井遺跡群ならではの発見といえます。

(2) 平地式建物 (写真5)

平地式建物が火砕流によって火災・倒壊し、上部構造が炭化した状態で発見されました。平地式建物の上部構造がこれほど良好な状態で出土した例は国内で初めての可能性があり、極めて重要な発見です。1号平地式建物の構造は、柱材、桁、垂木、又首(さす)、棟木、はり、母屋(もや)、篠、茅からなっています。垂木は桁の上に放射状に並んでいます。中央の太い炭化材は棟木でその周りの太い炭化材は母屋(もや)です。母屋(もや)を支える柱の炭化材と思われるものや柱痕も見つかっています。垂木と垂木の間には篠を縦方向に並べ、萱は、篠の上に縦方向と横方向に置かれひも状のもので縛って、棧等で押さえていたと推定されます。壁は土壁か網代状に編んだ壁か判断できませんが、今後の調査により確定できる可能性があります。

※平地式建物：竪穴建物のように地面を掘り込まず、地上に直接上屋を建築した建物。

掘り込みがないため、発掘調査で確認されることが少ない。

(3) 鍛冶遺構 (写真6・7)

6世紀初頭に発生した火砕流下から平地式建物の鍛冶遺構が発見されました。鍛冶遺構には炉や金床石が残っていました。金井下新田遺跡では5世紀後半の竪穴建物で鍛冶遺構が見つっていますが、人骨などと同時期(6世紀初頭)の鍛冶遺構は初めて見つかりました。残念ながら、この鍛冶遺構で製作された鉄製品は見つかっていません。